

目的論的機能主義に基づく志向性の自然化——ドレッスキとミリカンの表象論の比較検討

勝亦 佑磨

東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員

本発表の目的は、心の哲学における目的論的機能主義の立場から、私たちのいわゆる心の持つ「志向性」がいかにして自然化されるかという問題を考察することである。志向性とは、あるものがそれ自身とは別の何かを表象するという性質である。例えば、「目の前に水がある」という信念は「目の前に水があること」を表象しているという意味で、志向性を持つ。それでは、私たちの心は、なぜ志向性を持つのだろうか。単に心が心であるがゆえに志向性をもつという考えは、パトナム (Putnam, 1981) によって「指示の魔術理論」と呼ばれ、問題があるとして批判されてきた。そうだとすると、心がなぜ志向性を持つかを説明する必要がある。そこで、それに対する有力な説明の一つとして、志向性の自然化が挙げられるのである。このように、心の重要な特徴として志向性があり、志向性の自然化は、心がなぜ志向性を持つのかという問題に対する一定の解決策を提供するのである。

本発表では、こうした志向性の自然化の問題に取り組む立場の一つである「目的論的機能主義」に焦点を当てる。目的論的機能主義とは、心的状態を、生物の心臓や肺のように「生存に有益な」機能を持つ生物学的状態として捉えることで、志向性を自然化する立場である。目的論的機能主義の主流な見解は、ミリカンによる生物の進化に基づく表象論 (例えば Millikan, 1989) であり、それによれば、心的状態を生み出す形成機構 (生産者) とその心的状態に基づいて行動を引き起こす利用機構 (消費者) は、それぞれの機能を持つために祖先の生存に役立ち、それゆえに進化の過程で選択され、現在においても存続している。このようにして選択されてきた生物の器官や特性の持つ機能は目的論的機能と呼ばれ、目的論的機能主義の論者はこうした目的論的機能によって心的状態の持つ志向性を自然化するのである。

だが、こうした目的論的機能主義に基づく志向性の説明は、次のような点に関して立場が分かれる。第一に、主流な見解はミリカンによる生物の進化に基づく表象論であるが、ドレッスキが擁護するのは生物の学習に基づく表象論である (Dretske, 1988)。ドレッスキは、人間の意図的な行動に因果的に関与するような心的状態 (例えば信念など) は進化ではなく学習によって説明されるとして、進化のみならず学習に基づく表象論が必要であるという。第二に、ミリカンが表象の消費者を重視する一方で、ドレッスキは表象の生産者を重視するという点で両者は異なる。本発表ではこうした両者の表象論の比較検討を通し、志向性の自然化の問題を考察したい。